

保育者養成校の学生と保育現場と地域をつなぐ コミュニティコーディネーター的視点でのボランティア活動の構想

奥 恵

Concept of Volunteer Activities from The Perspective of a Community Coordinator that Connects Students of Childcare Teacher Training Schools with Childcare Sites and Local Communities

OKU Megumi

キーワード：ボランティア、保育者養成、保育現場、地域連携、コミュニティコーディネーター

はじめに

現代は、核家族化や少子高齢化、ネット社会等の影響によって、コミュニティが分断され、見えない貧困や孤立が問題となっている。保育者養成校である本学の学生においても、多様な人や場でのコミュニケーションや社会経験が不足していること等の影響から、自己肯定感の低い傾向が見受けられる。その為、失敗や指導をネガティブに捉え、自信が持てずに保育者の夢を諦めてしまう場合もある。このような現状を改善していく為に、保育者養成校と保育現場との連携がより一層求められている。今後は、実習や就職時期だけでなく、日常的に学生が訪れることのできるボランティア活動の機会を積極的に設けていく必要があるだろう。

これまで、保育者養成校におけるボランティア活動の意義や連携のあり方については、様々な研究で述べられてきた。近年では、新谷（2017）が、保育現場の他に高齢者施設や障害者施設も含めたボランティア活動を体験した学生において、専門職としての規範意識の芽生え、自身の認識や価値観の捉え直し、実習へ直接的につながる学び、キ

ャリア意識の向上があったことを報告している。また、時本ら（2019）は、全国保育士養成協議会東北ブロックの養成校を対象に、施設実習指導の一環としてのボランティア活動の実態調査を行っている。その中で、ボランティア活動の意義について、体験から施設の学びを得られることや施設のイメージが良い方向に変化すること、ボランティア先が実習や就職としてつながること等を報告している。つまり、ボランティア活動は学生の主体的な活動であることを前提としつつも、自身の成長から実習や就職へのつながりまで多様な学びの機会となることを、学生や養成校、保育現場等で共通認識していくことが重要だと考えられる。次に、ボランティア活動の連携のあり方としては、實川ら（2019）が千葉市内の保育所等を対象とした地域連携事業に関する調査を行っている。その結果、実施するには、子どもの学びや興味・関心が高い内容であり、交流する人が保育所の近隣にいること、地域住民や保育者の負担が少ないことが重要であると述べている。このように、養成校の学生のボランティア活動のニーズだけではなく、受け入れ側となる保育現場のニーズも確認して、マッチングしていく必要がある。しかし、広範囲にボランティアの受け入れを求めても、かえって新たな活動の計画や調整等が保育現場等の負担となる可能性や、仮に募集が増えたとしても参加できる学生が少なく、関係が繋がらずに終わって

しまう危険性もある。その為、まずは本学に届いているボランティア募集のチラシから、マッチングを検討していくことが先決だと思われる。このチラシの半数程が、実習や就職先として既に関係性のある保育現場等であることから、上記で述べた意義につながりやすいと考えたからである。

地域でのボランティア活動については、八尋(2018)が子どもの見守りネットワークの構築を目的としたゼミ活動の模擬店を、地域ボランティア活動に発展させたことを報告している。その中で、学生が一市民として参加する感覚が変わり、地域で子どもの成長を見守る体験ができたと考察している。このように、始まりは授業の一環であっても、受け入れ先と継続的で対等な関係性ができていくことによって、学生が代わっても主体的に活動しやすくなると言える。また、権ら(2018)は、大学主催の地域での世代間交流活動「笑話浪漫サロン」が学生のコミュニケーション能力を高めること、地域社会や人々への関心や視野が広がること、保育専門職の視点の形成につながることを分析している。これらの研究から、地域住民と交流するボランティア活動も学生にとって意義があり、養成校が受け入れ先と関係性を築いていく必要があると考えられる。本学においては、短期大学の過密な時間割の中で、授業料や生活の為にアルバイトを行い、ボランティア活動が困難な学生も多くいる。この現状を改善していく為に、まずは、本学のボランティア活動の内容と募集の状況を整理する。次に、学生のボランティアに関するニーズを調査し、活動しやすい内容や手続き方法等についても考察していく。そして、保育者養成におけるボランティア活動の位置付けを明確にすることで、今後のボランティア活動のあり方を検討していきたい。

目的

保育者養成校の学生を保育現場や地域とつなげ、協同的で継続的な関係性づくりのあり方をボランティア活動の現状から構想することを目的とした。

方法

本学のボランティア活動の内容については、ボランティア担当部会で集計している2019年度の中間報告データ(4月～9月)を用いた。次に、ボランティア活動に関する回答や要望を集約する為に、本学の学生を対象としたアンケートを2019年7月から10月にかけて実施した。有効回答数は89名であり、内訳は1年生60名、2年生29名であった。質問項目は、①ボランティア活動先の種別、②ボランティア活動の形態、③ボランティア活動の満足度、④ボランティア活動の継続意欲、⑤ボランティア活動の参加希望内容、⑥ボランティア活動の情報や周知の希望・要望、⑦ボランティア活動の依頼や申し込み方法の希望・要望、⑧ボランティア活動の企画、内容、参加者の希望・要望、⑨その他の回答である。回答は質問項目ごとに集計し、自由記述に関しては同回答をまとめて内容を分類した。また、本学に届いているボランティア募集のチラシの種別、参加学生数、日程や内容、申し込み方法や表記方法等を調べ、学生の参加につなげる方法を検討した。そして、保育者養成校における継続的な関係性をつないでいく方法については、コミュニティコーディネーター講座を受講し、そこで得た視点から考察した。

研究における倫理的配慮については、以下のことを遵守し行った。事前に研究対象の学生には、研究の主旨、研究者連絡先、個人情報の保護、研究協力への自由意思を説明し、同意書に直筆のサインを求めた。コミュニティコーディネーター講座の内容に関しては、まちの研究所株式会社に完成原稿の内容を確認していただき、同意書に直筆のサインを得た。本研究に関わって収集した資料・データ等の管理には万全を期すとともに、研究上知りえた個人情報を他に漏らさないようにした。ボランティア先の実名や特定できる表現は避け、研究倫理に配慮した。また、学校法人小池学園研究倫理公正委員会の倫理審査と承認を受け実

施した。

結果と考察

1. 本学における学生のボランティア活動の状況

2019年4月から9月末までの学生からのボランティア申し込み延数は116名であった（授業でのボランティア活動は省いた）。学年別では1年生69名、2年生47名である。ボランティア先は幼稚園9名、保育所32名、認定こども園1名、施設3名、その他（本学が主催した図書館イベントや、保育イベント等）71名であった。活動日数の内訳は、半日が78名（幼稚園6名、保育所17名、その他55名）である。半日のその他55名の内訳は、図書館イベント24名、保育イベント27名、児童館4名である。1日は36名（幼稚園3名、認定こども園1名、保育所15名、施設16名、その他1名）で、5日間で2名（キャンプ）であった。2018年の4月から9月の活動人数は16名、2017年は40名であったのに対して、今年度は大幅に増加している。その要因としては、本学が主催している図書館イベントにおいて、紙芝居サークル等の学生たちが実演したことや、地域の科学館での保育イベントを初めて開催したことが考えられる。また、保育所でのボランティア活動が多いのは、紙芝居サークルや手話サークル等の学生たちが子どもたちの前で実演する活動を行った為である。このように、個人だけではなく、サークルや団体でのボランティア活動も増えている為、今後も保育現場での実践や地域交流へ積極的につないでいきたい。

2. 本学の学生のボランティア活動に関する回答

(1) ボランティア活動先の種別（活動経験者のみ、複数回答可）

ボランティア活動先として、当てはまるものについて回答を求めたところ、「a. 保育所」23名、「b. 幼稚園」9名、「c. 認定こども園」2名、「d. 児童養護施設」3名、「e. 乳児院」9名、「f. 障害児（者）入所・通所施設」3名、「g.

その他」23名（児童館、科学館、図書館等）であった。本学で把握しているボランティア活動の傾向と同じく、保育所とその他のイベントが多い結果であった。学生の回答には9月以降にボランティア活動を行った内容も含まれている為、本学の中間報告と人数が異なる種別もみられた。

(2) ボランティア活動の形態（活動経験者のみ、複数回答可）

ボランティア活動の形態として、当てはまるものについて回答を求めたところ、「a. 施設主催のプログラムに参加（夏祭り、運動会等）」18名、「b. 短大主催のプログラムに参加（図書館イベント、保育イベント等）」20名、「c. 学生主催のプログラムに参加（サークル・団体活動等）」14名、「d. 個人での活動（通常の保育に参加等）」19名、「e. 自治体や地域団体主催のプログラムに参加（自治体での祭り、地域サークル活動等）」2名、「f. その他」5名であった。ボランティア活動の形態としては、多様なプログラムに参加していることが分かった。しかし、自治体や地域団体主催のプログラムとの関わりは少ない状況であった。

(3) ボランティア活動の満足度（活動経験者のみ選択回答、及び理由の自由記述）

ボランティア活動の満足度として、当てはまるものについて回答とその理由を求めたところ、「a. とても満足」25名、「b. 満足」21名、「c. 少し満足」4名、「d. 少し不満」1名、「e. 不満」0名、「f. とても不満」0名で、満足感を感じている学生が多い結果であった。

「a. とても満足」、及び「b. 満足」の理由としては、「楽しかった」という回答が8名、「色々な子どもと沢山関わるととても楽しかった」、「手伝いをたくさんできて、施設の人とも関わられた」等の子ども・利用者との関わりについての回答が7名であった。その他に、「発表会の際、保育者がどのような援助をしているのか、子どもたちが普段どのような生活を送っているのか等、実際に

自分の目で見ることができたから」、「夕涼み会のお手伝いをさせて頂き、先生方と同じ動きをし、準備や片付け、出し物の手伝いなど沢山経験することができた為」等の保育者や保育職の理解に関する回答が7名あった。また、「いつも新しい事を体験でき、新しいことを知ることができるから」、「ボランティアもしたからこそ、日誌が書きやすくなったりとメリットがたくさんある」等、自分の知識や技術の深まりに関する回答が14名であった。「観に来てくれた人たちが楽しそうにして良かった」、「紙芝居サークルで保育園にボランティアで行きましたが、紙芝居や手遊びを楽しんでいる子どもの姿が見れてとてもうれしかったです」という他者の喜ぶ姿についての回答が5名あった。さらに、「すごくてのしく、みんなで協力しているいろいろ考えてやることができたから」、「みんなで協力して満足することができました」等の学生間で協力して活動できたことに関する回答が2名あった。これらの回答結果から、学生は自身の知識や技術の向上、子どもや利用者との十分な関わり、保育職の理解の深まり、他者の喜ぶ姿等に満足を感じていることが示された。

次に、「c. 少し満足」、「d. 少し不満」の理由としては、「場所が遠かったが、楽しかった」、「子どもと触れ合える機会が少なかった」、「子どもたちと触れあえることは楽しかったが、担任の先生と合いませんでした」等、ボランティア先への距離や子どもとの関わり、保育者との関係性についての回答、「やってくれる人は全力でやってくれるけど、やってくれない人は、準備を手伝って当日でないとか、逆の人もいてとてもいやだった。全力でやっている人がかわいそう」という学生間の参加態度に対する回答があった。保育者養成校の学生は、他者との関わりについて満足感を得やすい傾向にある為、関わりの少なさや、関係が上手くいかないことが不満につながりやすいと考えられる。

(4) ボランティア活動の継続意欲（活動経験者のみ選択回答、及び理由の自由記述）

今回のボランティア活動の継続について、当てはまるものの回答とその理由を求めたところ、「a. 毎年、継続したい」21名、「b. 年に数回、継続したい」19名、「c. 毎月、継続したい」2名、「d. 継続したいができない」6名、「e. 継続したくない」2名であった。

まず、「a. 毎年、継続したい」と回答した理由としては、「続けていけば毎年くる子とかも出てくると思う」等の保育イベントの継続を求める回答が5名あった。「もう就職なので毎年というわけにはいきませんが、それほどとても良い園と感じたため」というボランティア先を勧める回答も1名あった。また、「もっと子ども、保育者の動きなどを知りたい」等の子どもや保育者への理解に関する回答が3名あった。さらに、「とても良い経験だし、子どもたちが楽しめる」等の子どものために活動したい回答が4名あった。「色々な人の話が聞けて経験になるため」等の自身の良い経験になったという回答が8名あった。

次に「b. 年に数回、継続したい」と回答した理由としては、「忙しいから」等の時間がない回答が8名、「これから力になるし、反省を活かしたいと思ったから」等の経験を活かす回答が3名、「保護者、子どもたちと実習以外で関われるのでとてもいいと思います。」等の子どもや保育者、保護者との関わりを喜ぶ回答が2名、「また行きたい」という回答も1名あった。

「c. 毎月、継続したい」と回答した理由としては、「2週続けて行くと、子どもが親しみを持ってくれて、反応が変わってくるので継続して参加したい」、「子どもと触れ合いたいから」等の子どもとの継続的な関わりを求める回答が2名あった。

「d. 継続したいができない」と回答した理由としては、「授業やサークルで参加したので、サークルで機会があれば、また参加したいと思っています」、「学校のこと、今しかできないことをしたいから」等の前向きな回答もあったが、「バイ

トがあるため、集まってくれと言われてもできない」等の時間がない回答が2名あった。

「e. 継続したくない」と回答した理由としては、「統一がとれなく、少人数でやりたいから」等の保育イベントでの人間関係の困難さに関する回答が2名あった。

これらの回答から、保育イベント等の活動は、年に1回から数回で継続したい学生が多いこと、保育現場での活動は定期的に行いたい学生もいることが分かった。継続できない理由は、時間がないことであったが、継続したくない理由には活動に不満を感じた回答と同様の人間関係の困難さが挙げられていた。

(5) ボランティア活動の参加希望内容（複数回答可）

今後、参加してみたいボランティア活動として、当てはまるものについて回答を求めたところ、活動経験者である51名については、「a. 施設主催のプログラム（夏祭り、運動会等）」31名、「b. 短大主催のプログラム（図書館イベント、保育発表イベント等）」6名、「c. 学生主催のプログラム（サークル・団体活動等）」6名、「d. 個人での活動（通常の保育に参加等）」15名、「e. 自治体や地域団体主催のプログラム（自治体での祭り、地域サークル活動等）」7名、「f. その他」2名（福祉施設1名、詳細なし1名）であった。この回答数と②ボランティア活動の形態の回答数を比較すると、施設主催のプログラムが18名の参加から31名の参加希望に、自治体や地域団体主催のプログラムが2名の参加から7名の参加希望に増加していた。このことは、学生が新たな経験を求めている結果とも考えられる。一方で短大主催のプログラムが20名の参加から6名の参加希望に減少していた。この理由については憶測になるが、2年生が卒業までに実施することは困難であると判断した可能性や、1年生で活動は継続してもらいたい自分自身が2年生となって活動することは難しいと判断した可能性等が考えられる。

次に、活動未経験者である37名については、「a. 施設主催のプログラム（夏祭り、運動会等）」26名、「b. 短大主催のプログラム（図書館イベント、保育発表イベント等）」14名、「c. 学生主催のプログラム（サークル・団体活動等）」6名、「d. 個人での活動（通常の保育に参加等）」21名、「e. 自治体や地域団体主催のプログラム（自治体での祭り、地域サークル活動等）」7名、「f. その他」1名であった。活動未経験の学生は複数回答が多く、様々な活動に関心を持っていることが窺えた。

(6) ボランティア活動の情報や周知の希望・要望（自由記述）

ボランティア活動の情報や周知に関する、希望・要望を求めたところ、ボランティア情報については、「駅から近場の所を中心に教えてほしい」が2名、「定期内で駅から近い所」、「群馬県の情報してほしい」、「短時間のボランティアなどがあればやりたい」、「いろいろな地域のものがあると良い」といった時間と金銭的な負担の少ない場所で、自分にあったボランティアを選択したい傾向があると感じられた。内容に関しては、「子どもが主体のイベントに参加してみたい」、「認定こども園、モンテッソーリなどを行っている園の日常」といった、自分が経験したことのない活動や授業で習った教育方法の実践に関心を持っていると思われる。

募集のチラシの内容については、「どこの市（場所）でやっているのかが見づらい」、「どんなボランティアをしているのか、その実際の様子などがわかるように」、「園に関して知りたい」、「希望する分野・施設の種類のボランティアが少ない」。また、「ポータルサイトがない」、「ネットで見たい」といった回答があった為、依頼先に記載内容の要望を伝えることや、ネットでの情報公開ができないか相談する機会を設ける必要がある。

本学のボランティア募集のチラシは多い為、これまで、学内の実習指導センター内（昼休みと放課後に開放）で掲示していたが、今年度からは、

募集締め切りの近いチラシは学生の目につく渡り廊下の掲示板に移動させた。学生からも「廊下に掲示」が2名、「指導センターは、空いている時間が決まっている為、図書館などにも掲示があると見やすい」といった回答が挙げられているので、目につきやすく、いつでも確認できる場所に掲示する方法を検討していきたい。

(7) ボランティア活動の依頼や申し込み方法の希望・要望（自由記述）

ボランティア活動の依頼や申し込み方法に関する、希望・要望を求めたところ、「電話とかではなく、サイトのように簡単な申し込みができるようになると思う」、「ネットでもできるようにしてもらえるとらく」、「学校が取り次いでほしい」、「必要最低限の準備にしてほしい」といった便利さや気軽さを求める回答が挙げられた。また、「申し込み方が分からない」という回答もあった為、手続きの説明を定期的に行うことや、方法が記載されているハンドブックの活用を勧めることの必要性も感じられた。

(8) ボランティア活動の企画、内容、参加者の希望・要望（自由記述）

ボランティア活動の企画や内容、参加者に関する希望・要望を求めたところ、「運動遊び」、「紙芝居や絵本などひろうできる場がほしいと思います」、「1日あずかるとかやってみたい」、「皆で楽しめるもの」といった学生の特技や関心のある内容をした回答が挙げられた。また、「家から近い」、「保育園」、「自治体や地域のイベントに、何かで参加したい」といった内容ではなくボランティア場所の要望もあった。学生が主体となって行ったイベントを経験した学生は「計画的に行うために、先生方もいて進行して欲しい」、「毎回遅れたり、あまり参加しない人は参加すべきではないと思います」といった学生間では言いづらいボランティアの課題も挙げられていた。今後は、学生の主体性を優先しつつも、他学年や参加者が多い活動の場合は、必要に応じて教員等が意思疎

通のサポートができる体制を整えておく必要がある。

(9) その他の回答（自由記述）

上記の質問の他に、ボランティアに関する希望や要望を求めたところ、「所沢市内のボランティアを知りたいです」など、自分の通いやすい場所のボランティア情報を望む回答が3名あった。また、ボランティア経験はないが、「今後のために少しでもボランティアに参加したいと思う」や「主に乳児の関わるボランティアはしてみたいなと思います」といった回答も挙げられていた。学生の中には、ボランティア活動に関心はあっても、自分から依頼の電話を掛けることや個人で行動を起こすことには不安を感じ、受け身になっている様子を感じられる。そのような学生には、募集のチラシや実習・就職で関係のある園を紹介すること、複数の学生で参加することから始めていきたい。

3. ボランティアの募集内容の考察

保育施設等からのボランティア依頼のチラシは、2019年4月から9月末までで48件であった。その内、同じ施設をまとめると35施設からの依頼となる。施設種別としては、保育園が13件、幼稚園が9件、施設（児童養護施設、障害者支援施設、乳児院等）が7件、大学（本学）が1件、認定こども園が1件、その他（児童館や社会福祉協議会等）が4件であった。チラシでのボランティア募集に参加した学生は53名であった。その内、チラシで募集した本学の図書館イベントの参加者24名を除くと、学外でのボランティアに参加した学生は29名となる。そして、35施設からの依頼のうち、参加したのは8件であった。

次に、ボランティア先として参加がなかったものにはどのような要因があるのかを考察し、より多くのボランティア先と学生を繋げる方法を検討した。ボランティア募集のあった48件のチラシの内、14件は活動日の指定がなく、随時募集していた。日付が記載されていたチラシは、6月が

2件、7月が9件、8月が7件、9月が4件、10月が8件（9月末の募集時点）となっている。本学の授業日程等と重なっているかどうか確認した結果、9件が授業や試験、大学祭、実習等と重なっていた。また、複数や長期間の日程が記載されていたチラシは11件あり、7月から8月の夏期保育、9月から10月の運動会や祭り等の活動内容が多かった。しかし、本学は8月中旬の夏季休暇以外は8月末まで前期授業があり、9月には試験期間と追再試験期間、9月末から後期授業が始まり、10月半ばの大学祭、11月上旬の実習と続く為、ボランティアに参加するのが困難な状況であることが推察された。学生が参加した期間は、6月が1件、7月が4件、8月が3件、10月に2件参加予定である。これらのことから、学生は6月から8月にかけて振替授業等と重なっていない土日祝でボランティアに参加しており、9月の試験・追再試験期間は参加できていないことが分かった。しかし、9月上旬の試験期間中にボランティアの情報を確認していないことで、9月下旬の後期授業開始後からボランティア活動が減っているとも考えられる。

さらに、学生のアンケート結果にあった場所や通いやすさについて確認したところ、チラシに住所は書かれていたが、園の場所の地図や最寄り駅からの所要時間等は記載されていないものが半数以上あった。また、申し込み方法については、電話での申し込みが大半であったが、15件にはメールアドレスが記載、9件にはQRコードが記載されており、申し込み方法が柔軟に対応されていた。

ボランティア活動の内容を分類してみると、通常保育が15件と最も多く、次いでイベント（図書館イベント、ライブ等）が8件、運動会が7件、祭り（夏祭り、秋祭り等）が7件、夏期保育は4件、その他（キャンプ、遠足、託児等）8件になった。その内、学生が参加した活動と参加予定の内容はイベントが3件、祭りが5件、その他（キャンプ、託児等）2件であった。チラシでのボランティア参加は、通常保育とは異なるイベントや

祭り等だったが、活動先は保育園、幼稚園、児童養護施設、乳児院、障害者施設、児童館、本学など多様な場であった。つまり、学生は施設種別ではなく、チラシの内容から楽しそうなイベントや祭りに興味を持っていることが示された。

アンケートで学生に今後、参加してみたいボランティア活動の回答を求めたところ、最も多かったのは施設主催のプログラム（夏祭り、運動会等）の57名であり、チラシによるボランティアの活動内容も、祭りや運動会、イベントを合わせると半数を占めていた。個人での活動（通常の保育に参加等）も36名の希望はあるが、チラシによる14件の募集には学生が参加していない。自宅からの通いやすさも要因にあるかもしれないが、個人での申し込みや活動に不安や緊張を感じている可能性もある。今年度の学生へのボランティア周知方法は、ボランティア担当部会の教員から授業開始前にチラシを紹介し、その後は学内に掲示する流れで行った。申し込み用紙が同封されている場合や参加希望の学生が多い場合は、教員が一括して申し込みを行うこともあった。これらのことから、本学の授業日程等との重なりは避けられないが、複数の日程をチラシに掲載することで周知や申し込みの可能性が高まると思われる。また、学生は通いやすさを重視している為、チラシには住所だけでなく最寄り駅からの所要時間や地図、QRコードやHPアドレス等の詳細を記載することで通う方法を見つけやすく、関心を持ちやすくなると思われる。申し込みについては、電話以外にもメールやLINE等の柔軟な方法をとることや、大学で希望の学生を取りまとめて事前に連絡しておくことで、学生がボランティア先と連絡を取りやすくする方法も進めていきたい。特に、1年生は学ぶことへの意欲は高いが、時間割が過密で活動する時間がない為、機会を持っていない可能性がある。2年生は5月・6月と実習が続き、7月からは就職活動として動き出す時期になる為、ボランティアのチラシよりも求人票から見学先を見つけている傾向がある。今後は、1年生からボランティアを通じた学びや就職先との出会いにつ

なげること意識した体制とコミュニティづくりを行っていく必要がある。

4. コミュニティコーディネーターの役割

研究テーマに関するコミュニティづくりを学ぶ為、2019年11月16日と17日の2日間、「第2回コミュニティコーディネーター講座」に参加した。主催は「まちの研究所株式会社」と「ナチュラルスマイルジャパン株式会社」で、「東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センター（Cedep）」と共催し、昨年度から開催されている。1日目は10時から18時まで、東京大学本郷キャンパスにて、40名の参加者が講義やグループワークを通じて学んだ。講師は「まちの保育園・こども園」の各園に保育者とは別に1名配置されているコミュニティコーディネーター（以下、CC）である。CCは、「一人ひとりの存在そのものを喜び、互いに育みあうコミュニティを創造する」という理念のもと、子どもを中心とした保育者、保護者、地域の人々をつなぎ、コミュニティ（共同体）をコーディネート（調整）する役割を担っている。例えば、「まちの保育園 小竹向原」の報告では、CCが園の事務や環境整備等のどのようなことにも関わり、まずは“give”することを重視して園内の関係性を築いていた。その後、保護者の中で音楽のプレーヤーがいたことで音楽会を企画する等、保護者や園外の人々に関わるきっかけづくりを実践していた。また、「まちの保育園 六本木分園」に併設されたカフェは、食を通じて保育園と保護者や地域をつなぐ役割を担っている。そこで働くCCは、保育者や保護者が悩みや相談等を話しやすい雰囲気づくりを意識し、「余白となり、余白をつくること」が大切であると語っていた。このように、職場の役職等による上下関係や保育者や保護者の立場に属さないCCだからこそ、各関係との余白となる適度な距離感が保て、一個人として対等な関係性が築きやすいのだと考えられる。講義の後に、ワークシートを用いて各自の職場で内と内、内から外、外から内、外と外の関係性をつなぐ方法を検討し

た。2日目は、午前中に「まちの保育園 六本木」での現地視察を行った。園内は内装に木材を多用しており、掘炬燵式の落ち着けるコーナーや保護者と子どもの目線に合わせたドキュメンテーション等が飾られていた。午後は「まちのこども園 代々木公園」で講座を受けた後、昨年CC講座を受講した2名からの実践報告と新設保育園の建設反対問題の事例研究が発表された。2日間の講座のまとめとして、CCを配置することやCCの資格を取得することが目的ではなく、一人ひとりが互いの関係性をつないで調整していくCC的な存在となり、同じ志を持つ様々な職の人が地域として展望をつないでいくことが重要であるという共通認識がなされた。

5. 保育者養成校におけるCC的役割

今回、CC講座を受講することで職場内の連携の重要性を再認識し、学生と保育現場や地域資源をつなげていくことの必要性を感じた。保育者養成校におけるコミュニティの中心を学生とすると、内と内の関係性は、学生間、学生と教職員、教職員間となる。本研究におけるボランティア活動では、一人では活動しにくい学生も教職員が要望を聞き取り、複数の参加学生の関係性をつなぐことで、参加しやすい雰囲気や流れを築くことができる。しかし、現在は学生が活動前後に申し込み書と報告書を設置してあるポストに提出することで担当教員が情報をデータ管理している。今後、関係性をつなげる為には、ボランティア活動に関する窓口を設け、学生の顔を見て対応することや、他の参加学生との関係づくりのサポートや相談等について教職員で連携して行う必要がある。また、ボランティア活動を行っている学生の情報についても、教職員の会議等で共有していきたい。また、ボランティア活動の報告書の情報が学生間で共有されていないことも今後の課題である。報告書の情報をどのように公開するか、プライバシー保護等の観点からも慎重に検討していく必要はあるが、同学年だけでなく、他学年の学びをつなげるきっかけにもなり、依頼先との継続的な関係を築くこ

とができると考えられる。今年度は、学園祭で行われる学生全員参加の学会で実習や授業、ボランティア活動の学びがそれぞれ発表された。このような全体での学びの共有を今後も継続していくことや、新入生に向けた2年生からのボランティア活動の意義や楽しさの説明の機会があると、より意欲が高まるのではないかと感じる。

次に、内から外、外から内の関係性としては、学生から保育現場や地域、保育現場や地域から学生となる。今回、アンケートの結果から、短大や学生主催のプログラムに関心を持つ学生もいることが明らかになった。活動の主催側になることで、学生は計画性や協調性を学んでいたが、準備や実演をすることで手一杯になってしまい、参加した子どもとの関わりが十分に持てなかったという課題も感じられた。今後は学生と参加者が交流できる内容の検討や活動後の交流の時間を設ける等の視点を取り入れていきたい。また、学生のサークルや団体が、時間割の過密な状況でも活動できるように、近隣施設との連携をとっていくことも求められる。また、保育現場や地域からは大学にチラシが届くが、実習や就職等で関係性のある園全てからではない。実習後に直接、実習生にボランティアの案内をする場合や、就職説明会等に参加した学生に対して見学やボランティアを勧める場合はあるが、求人を出しても学生が受けに来ない悩みを抱え、大学に求人票を持参する園も増えている。その際に、求人票やパンフレットだけでなく、ボランティアの受け入れがあればチラシでの募集を依頼している。もし、今年度は就職する学生がいなかったとしても、来年度以降に学生と出会うきっかけを作っていくことができればと考えているからである。

外と外の関係性としては、保育現場と地域となるが、保育者養成校として実践できていることは、オープンキャンパスで高校生を連れて保育園を見学するプログラムや、公開講座で埼玉県が推進している「見えないチカラと夢のリアル体験教室・プレミア」の一環として、小学生が練習した紙芝居や劇を保育園で実践する体験教室等である。オ

ープンキャンパスでは学生スタッフが積極的に活躍し、後輩に引き継いでいく関係性を築いているが、保育園を訪問する公開講座では、まだ学生のボランティアを受け入れてはいない（2020年1月時点）。今後、参加者との交流や保育実践のサポートを行う役割として、学生やサークルの協力を得ることも考えていきたい。

今後の課題

本研究では、本学のボランティア活動に関する現状と学生のアンケート調査、ボランティア募集のチラシの内容の分析から、保育者養成校の学生を保育現場や地域とつなげ、協同的で継続的な関係性づくりを構想することを目的とした。

ボランティア活動の現状としては、本学が主催しているイベントに参加した学生が多かったこと、サークルや団体での学外ボランティア活動が増えたこと等による参加学生の増加が確認された。今後もイベントを継続的に開催していきたいが、参加する個人やサークルの学生が入れ代わっても維持できるかが課題となる。

次に、本学の学生を対象としたボランティア活動に関するアンケート調査を行った。活動経験者においては、①施設・短大・学生主催等の多様な活動形態に参加しているが、自治体や地域団体主催のプログラムの参加は少ないこと、②保育者を目指す学生は、他者との関わりについて満足感を得やすい傾向がある為、関わりの少なさや、関係が上手くいかないことが不満につながりやすいこと、③活動を年1回から数回継続したい意欲はあるが、時間がなくて継続できない学生や、人間関係の問題で継続したくない学生がいること、④今後の活動希望は、自治体・地域団体主催のプログラム等の新たな経験も求めている為、幅広い経験の場を支援していく課題が明らかにされた。未経験者においては、様々な活動に関心を持っている為、参加のきっかけを作ることが課題になる。学生からの要望に対する改善策としては、①依頼先にチラシの記載内容やネットでの情報公開を相談

すること、②学内で目につきやすく、いつでも確認できる場所にチラシを掲示すること、③手続きの説明やハンドブックの活用をすすめること、④特技や関心のある内容ができる活動の支援をすること等が考えられる。

そして、ボランティア依頼のチラシの参加を促す改善策としては、①複数の日程を掲載すること、②住所と最寄り駅からの所要時間や地図等の詳細を記載すること、③申し込みはメールやLINE等の柔軟な方法をとること、④大学で希望の学生を取りまとめて事前に連絡しておくこと等があり、これらを依頼先と共有することが今後の課題となった。

その後、CC講座で学んだCC的視点でボランティア活動の改善を考察した。その結果、現在、実践している個々の取り組みをつなげていくことが、より広がりのある関係性を生み出すことになると考えられる。また、ボランティア活動によって、実習・就職先との長期的な関係性づくりが構築され、就職に向けて段階的に社会性やコミュニケーション能力を学び、保育者のキャリアが明確化されていくのだという共通認識を広めていくことも、今後の課題とする。

千葉市内の保育所等の実態調査から」、『植草学園大学研究紀要』、11、植草学園大学、2019. 3、41-51.

- 4) 八尋茂樹「中山間地域の保育短大生が取り組む地域間交流型実地体験活動の意義－新見市萬歳地区住民との交流から－」、『新見公立大学紀要』、38-2、新見公立大学、2018、173-177.
- 5) 権滋珠、岸本美紀、仲田勝美、小野隆「地域での世代間交流活動の参加経験が保育士を目指す大学生の認識に及ぼす影響－本学学生による「笑話浪漫サロン」の実践を通して－」、『岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 地域協働研究』、4、岡崎女子大学・岡崎女子短期大学、2018. 3、39-48.

奥 恵 (埼玉東萌短期大学専任講師)

引用文献

- 1) 新谷龍太郎「保育職志望学生におけるボランティア体験の意義」、『保育研究』、47、平安女学院大学短期大学部保育科保育研究会、2017. 9、34-43.
- 2) 時本英知、日野さくら、三浦主博、竹之下典祥、瀬尾知子、大迫章史、福田真一、細川梢、石森真由子、利根川智子「保育（施設）実習指導の一環としてのボランティア活動の実際：全国保育士養成協議会東北ブロック内における調査より（2）」、『青森中央短期大学研究紀要』、32、青森中央短期大学、2019. 3、179-187.
- 3) 實川慎子、高木夏奈子、栗原ひとみ、山田千愛、高野良子「保育現場の地域連携事業：